

『国際協力のひとこま』

★受託事業事例紹介／南アジア地域・マルチセクターで取り組む栄養改善コース

—持続可能な開発目標（SDG ‘s）；エスディーゼーズって聞いたことありますか？—

日本での生活環境が、地球上の外国すべて同じ、或いは、だいたい似ているか？と言うと、違うことの方が多くあります。

世界の国々の状況を経済的な視点で、区分されていて、①発展途上国、②先進国、さらには③中心国など定義付けられているようです。

その中でも、発展途上国では、日本の生活などで当たり前だと思っていることが、実は、普通でないことが、少なくありません。

例えば、日本での食事を例にとりますと、主食、おかず（メイン、お惣菜）、汁物など様々なものがあり、主食だけを例にとっても、ご飯（お米）、パン、麺類（そば、うどん、パスタ）など、バラエティー豊富ですね。

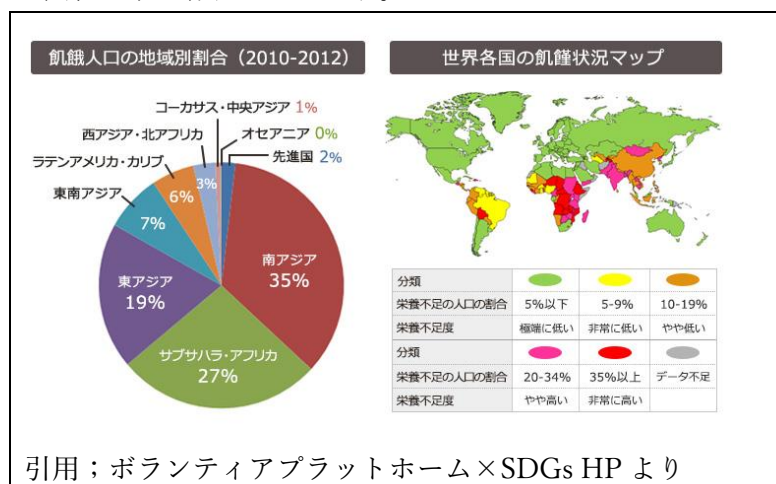
ですが、そんな日本でも、ひと昔前、日本の主食は、ご飯（お米）のみが一般的、主流でしたし、また『一汁一菜（いちじゅういっさい）』と言われ、主食以外では、みそ汁（汁；じゅう）と野菜等によるおかず1品（菜；さい）だけが食卓に並んでいた時代も、そう遠いものではありません。

当時、子どもたちの栄養状態によるためか、今の平均的な体格より身長が低く、スリムな子供たちが多くいたようです。

世界の国々それぞれ、農作物の生産環境も違いますし、作られる農産物にも違いがありますが、それと同様、食事にも違いがありますが、発展途上国での日常的食事は、同じ食材で、主食が作られ、メニューも多彩でない、いわゆる定番食事（日本でのご飯とみそ汁、漬物のセットのよう）が日々続く生活様式であるケースも少なくないようです。

栄養と言う視点では、発展途上国の人々は、大人も子供も、前期の様な定番食事では、栄養バランスが十分でなく、栄養素のいくつかが不足しているばかりか、人の活動に必要なカロリーも十分でないことが多くあります。

特に、お母さん自身が、栄養不足なことが影響し、お腹の中で育つ赤ちゃんの栄養状態が良くなく、生まれてから成長に影響してしまう例も多く、成長、成育不良だけでなく、乳幼児と言われる（5歳未満の子ども）の生存率が低い国、地域が存在しています。



上図に示されている飢餓人口の多いとされる南アジア地域を対象に、NPOIFPaT では、2022 年 11 月以降、ネパール・パキスタンからの技術研修員を受け入れ、日本での栄養改善の歴史、取り組みの紹介をはじめとして、講義・現場視察、演習ならびに討議を組み合わせ、研修員の出身国での今後の取り組みに反映してもらえよう、研修事業を展開しました。(以下、写真；講義・視察の様子紹介)

	
<p>主要トピックについて話し合いを実施。共同思考により女性がエンパワーメントされていく家庭を討議。</p>	<p>食環境整備の一環として茨城県庁食堂で表示されているおすすめ献立。エネルギーや塩の摂取量を説明。</p>
	
<p>直売所を訪問。女性のみで運営されており、販売の工夫を聞くとともに、新鮮な野菜・果物に興味を持つ。</p>	<p>家庭菜園の視察。化学肥料等の使用なく、作物の輪作などの工夫を通じて食の多様化が図られ、家庭菜園により安全な食が保証されていた。</p>
	
<p>豆腐作り体験。体験活動を通じて、栄養豊富な大豆活用方法について知見を深める。</p>	<p>学校給食オンライン訪問。コロナ感染リスクに配慮し、小学校側にカメラを複数配置し、オンラインで見学することで、子供たちの様子も感じていただけた。</p>

研修プログラムとしては、対象国における母子低栄養の原因と思われる「家庭レベルでの食料安全(食事メニューなどの改善)」、「衛生環境と保健サービス」、「育児ケア：母乳と補完食」など、マルチな視点に目を向ける必要があるため、プログラム構成に工夫を凝らし、複数の関係機関との役割分担、各機関間の連携事例から制度作り、政策の在り方、組織的实施体制を如何に組み立てることで、より良い方向づけが可能となるか、学んでいただけるよう、プログラムを進めました。

約1か月間の研修を通じ、参加研修員は多くの気づきを得ていただいたようで、研修最後のセッションでは、帰国後、自身の業務にどのような改善を取り入れるか、計画書（帰国後活動の青写真）を作成してもらいました。

研修員の気づきから、以下に一部ですが、抽出、ご紹介いたします。

- ・ 作物の多様化を推進するためには、レシピを作ることが重要である。食べ方を知らないと上手に消費できず、また毎日の食生活を変えていくためにはレシピは役に立つ。
- ・ 家庭菜園においては、同じ作物づくりでなく、輪作が重要ということを理解した。豆類、野菜類など順繰りに栽培し、病虫害被害を避け、生産性もあがり、食生活も多様化する。
- ・ 乳幼児の健康検診の中に、身体的な発達（成長）だけでなく、こどもとの遊び・ふれあいの時間が設けられるなど、社会的スキルを向上させる取り組みも含まれていたことに驚き。
- ・ 自国には、栄養に特化した調査が制度化されていない。学校レベルや世帯レベルの調査があればより良い栄養改善が実施（応用）できると思う。

こうした研修事業を通じた開発支援の成果は、年1度の研修で、大きな変化を生み出せるものではありませんが、継続的に情報を伝え、得た知見、ノウハウなどを来日された研修員を通じ、拡散していくことで、各国の人材づくりに貢献し、かつSDGs 17このゴールのうち、【ゴール②飢餓ゼロに】ばかりか、【ゴール④すべての人に健康を】などの改善の一助になることを願いつつ、研修事業を、可能な限り、続けていきたいと思えます。

以上